
ラブカクテルス その67

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その67

【Nコード】

N4124E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は特別な出会いに乾杯したいカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は期待でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私の名前は黒川。

大して変わらぬ毎日を送る至って普通のサラリーマンだ。

毎日が退屈だ。

ただただ流れるだけの虚しい日々だ。

帰宅の電車の中で私はまた、同じ見慣れた景色を眺めてため息をついた。

何か面白い事はないだろうか？

そんな事をいつも思い、ふとした時間を過ごす。

しかし実際私は、厄介な事が嫌いだ。

しかもかなりの面倒くさがりで、その上引っ込み自安の弱気な性格。結婚して子供は二人いるが、もう親を毛嫌する年頃。

妻も趣味のダンスやお茶やダイエットに夢中で、私は一人仕事に黙々と通う毎日。

皆、私のおかげで生活ができているというのに勝手なものだ。

俺は何だか一人取り残されたようで、小さく舌打ちをするのが癖になっていて、いつもそれをした後に一層の虚しさを感じるのだった。そうは言っても、仕事を私から取ったら何が残るのか？

今のところ私には仕事しかない。

だが、その仕事でさえウダツが上がらない私は、居ても居なくても変わらないような存在で、それをわかつてはいるが、気付かないようにしている自分をこの頃我慢できなくなっていたのだった。

私は少し、そのやるせない気持ちを軽くしようと、たまに行くバーに寄ることにし、家からは少し手前の駅で電車を降りた。

寂れた商店街を抜けて大通りに出る手前のマンション。その半地下になっている四軒ある店の一つがそのバーだった。

黒地に紫色の文字で、バーと書かれている看板は、中の蛍光灯が切れかかっているせいかチカチカしていて、それだけでなくも寂しいこの界限を一層惨めにしているようだった。

しかし何で私がこのバーに通うのか？それには理由があった。

それはこの店が知る人ぞ知る、今時珍しいジャズの生演奏が見れる店だからであった。

きっとここは、大通りが表にあるおかげで騒音がそれほど気にならず、そのことに対してとやかく苦情を言われずに済むことから、こんな変びなこの場所を選んだのではないか？

私は勝手にそんな推測をしながらこの店を受け入れたのだった。

ウイスキーを片手にジャズを聴く。

それは私にとって、かなり贅沢な時間だ。

心がまるで、弾む重低音に揉まれてほぐされる気分。

私は手間を懸けて丸く削られた、グラスに丁度良いサイズの野球ボールのような氷をグラスの中で遊ばせて、何とも言えない綺麗な高音を響かせ、なんとなく演奏に加えて楽しんだ。

そんな事をしばらく楽しむ私にふと、二つ離れた席にいた白髪混じりの、いかにも紳士という風格の男がこちらに向かって声を掛けて

きたことで、やっと私のグラスの中の氷は静かになることができたのだ。

男は私に、ジャズがお好きなようですね。と訪ねてきたが、あまりの当然の質問である筈のその言葉には品があり、うっとしさを感ぜせない雰囲気があるのが、なぜか流石だと関心させられるのだ。

私は、若い頃からよく聴いていて。と、さりげなく、そして差し支えない返事を、少し習って紳士風にしてみると、その紳士は身を少し乗り出し、そうですか。私もなんです。と、懐かしいあの頃に夢中になったミュージシャンの名前やバンド名を口にしてきて、それがまた、こちらも思わず頬が勝手に弛み、ニヤニヤしそうなものばかりだったため、珍しく私はその初めて会った紳士と、懐かしい話題に華を咲かせる事となった。

ジャズの音色の邪魔にならないよう、しかし多少興奮気味のソソコソ声で私達は小一時間程熱論し、そしてやがては話題が反れて、互いに色々な話しをし始めた。

しかしそんな中、二人共名前を名乗っていなかった事に気づき、遅れながらもお互い名前を言い合う事になり、紳士の名前が赤川だと知った。

そして続いて私が黒川だと名乗ると、赤川氏の表情がなぜか一気に驚きのものに変わり、そして私の肩をガツチリと掴んできたのだ。

その不意を付かれた行為に、私はとても驚いたばかりでなく、掴まれたその肩にくる激しい痛みで顔を歪めた。

それを見た赤川氏は、ハッと我に返ったようで、私のその肩から手を離し、申し訳なさそうに謝ってくるのだ。

私は訳が解らず、まだ痛みが残る肩を擦りながら、謝る赤川氏をなだめると、赤川氏はその訳を聞いて欲しいと私に話し出すのだ。赤川氏は先程のジャズの事について語っていた時よりもっと興奮した様子で、不思議な話しをし出した。

虹の川という伝説をご存知ですか？

赤川氏のその質問に私が首を横に振ると、赤川氏は実は、と続けた。つまりは、昔からの言い伝えと言うものがあり、それがどうやら私達のように、名字に色名と川が付く人間が七人揃う事がもし出来れば、自由に虹を起こしてその上を歩いて行けると言われているらしく、赤川氏はそれをインターネットで集ったところ、老若男女問わず、今六人まで揃っていて、あとの最後の一人を丁度探し続けたところなのだそうだ。

赤川氏は熱い視線を私に向けて、どうでしょうか？黒はまだいない色です。一緒に加わってみませんか？

そして、その素晴らしい伝説の証人として、共に虹を渡りましょう。と言って、硬い握手を私の手に覆い被せてくるのだった。

私はそんな話を信じる事が出来なかったが、赤川氏の目の真剣さを見れば、それが冗談とは思えず、そしてその迫力に負けて反射的に頷いてしまふのだった。

赤川氏はそれを見て子供の様に喜んだが、どうやらそれが仕方ないことだとすぐにわかった。

なぜなら赤川氏の話では、彼は子供の頃から祖母にその話しを聞いて以来それを思い続けていて、最近のインターネットによって、その事を現実に来るのではないだろうかとかなり苦労して、触った事もなかったパソコンを学び、ホームページを自分で作り、あちこちで情報を仕入れて、今のここまで来たのだから。

きっと全てに於いて時間を要する作業や手間が掛かったに違いない。それでも諦めずにここまで成し遂げた事実は尊敬に値するものだった。

そんな子供の目をして語る赤川氏の姿を見て、私もなんだかワクワクしてしまい、そしていつの間にかかなりの時間をバーで過ごしているのに気付くまで、もう気持ちは虹の上を歩いているようだった。しかし、ふと見た時計に邪魔されて帰らなければならぬ頃だと、夢中になっていた時間の経つ早さに驚きながらもしぶしぶ帰ること

を決め、別れることになった時に赤川氏は、今度は鋭い目つきで私に言った。

この話は誰にも話してはなりません。

なぜなら虹を歩けるのは選ばれた七人の人達だけ。例えそれが家族であつても八人目がもしいれば、伝説は失敗します。

その事を忘れないように。

赤川氏はそう言い終ると、私に連絡先と伝説を実行に移す場所と日時を書いた紙を私に渡し、さっきの子供の様な顔に表情を戻して、ではまた。と私より先に席を立てて店を出て行った。

私はグラスに残っていた、かなり薄めのウイスキーを一気に飲み干し、微かに形を保ったグラスの中の氷を少しカランカランと鳴らしてみた。

すると氷は店内にある薄暗い照明から何とか光を掻き集めて、表面に七色の輝きを放った。

私は何か面白くなってきた気がして思わずニヤリとして席を立ったのだった。

私はそれから伝説を実行に移す日までに何日か間があつたため、あまり普段は利用しないインターネットを珍しく開き、赤川氏のホームページを覗いてみることにした。

虹川七人と題したそのサイトは、初めから赤川氏の熱い想いを伝える文章から始まり、伝説について関心するほど細かく、よく調べて書かれていた。

そして意見投稿の閲覧や、几帳面に更新されたコメントからは、今集まっているメンバーの経緯や、彼らがその他のメンバーを捜そうとした苦労話などが興味深く書いてあり、それによると赤川氏から始まったメンバーは、白川氏、緑川氏、黄川氏、青川氏、桃川氏。そしてサイトには更新されていなかったが、私が七人目で黒川という訳か。

私はこの事を誰かに話したくなつたが、いや、赤川氏との約束を思

い出し、誰もいない自分の部屋で口に手を当てて慌てたのだった。そう考えると、サイトに私の事を更新していないのは、その秘密を守る事からなのか？

私はまた、一人でワクワクする気持ちを抑えるのにニヤリとした。

約束の日。

メモにあった時間帯は平日にも関わらずに、昼間の時間帯だった。私は何と言って会社を抜け出そうか考えたが、何か自分の器が小さい事に気付कि、思い切って朝から会社を休む事にした。

どうせ私はその後ここに帰ってくるのかも分からないのだ。

そう、伝説というのが本当なら、会社で私が出来ない話題に騒いでいる頃には、どこか遠い素晴らしい場所を歩いているに違いない。

虹の上を。

とは言うものの、実際は私が会社を休んだからと言って、騒ぎになる訳もないか。

私は快晴の空を見上げ、スーツのネクタイを少し弛めながら約束の場所へと向うのだった。

伝説が実話として語られる筈の聖地へ。

電車を乗り継ぎたどり着いたメモの場所は、何のヘンテツもなかったの野原だった。

私は少し早かったかと、ふと空を見上げた。

すると、驚くことに、その視線の先には微かに見える虹があった。

私は時計を覗き込み、指定された時間が、まだ過ぎていないことを確認し、メモも再度読んでみたが、誤りはなく、どうしてこうなっているのかが解らずにいると、よく見たその虹の上には何やら人影が小さいながらも七つ確認することができたのに、更に驚いた。

そんなバカな。

私は自分を入れないと七人にならない筈だと思わず叫んで、虹の色を確かめた。

赤、白、緑、黄色、青、桃、そして、く、ん？

あれは！

そう。紫だった。

私はそれを目にして初めてこうなった理由が解った気がした。

きつと私が赤川氏に見つけられた頃に、別の色川、そう、紫川氏がどこかで見つけれられた、もしくは志願してきたに違いなかった。

そして先に揃った六人で、虹に加えるなら黒と紫のどちらがいいかを検討し、当然色的に綺麗な紫色を選ぶこととなり、時間をずらして集合したのだろう。

私は一気に体から力が抜けるのを感じ、しかしその目の前に展開されている伝説の風景に心を打たれてしまったのは、間違いなかった。私はそれが消えて無くなってしまいうまで、記憶にそれがまるで写真のように焼き付いて残るように、瞬きするのも忘れて見つめ続けたのだった。

それからの彼らの消息は、いくらインターネットなどで探してみても、手がかり一つ見つける事が出来ずに、そして例のサイト、虹川七人もあれ以来検索にさえ引つかからなくなってしまった。

私はあれから日がな一日、暇さえあるとあの伝説の風景を思い返すようになつていた。そして、彼らはどこへ？

その想像を膨らましながら空を見上げる。

私も行きたい。

その正直な気持ちは心から無くなることはなく、そして思いは募り、そして弾けたのだった。

私は自分でホームページを作ってしまった。

虹川七人第二回募集のお知らせ。

次こそ必ずや、虹の一つになってみせる。

そう堅い意思を文面に注ぎ、ワクワクする心を高揚させ、ニヤリと

するのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4124e/>

ラブカクテルス その67

2010年12月18日18時09分発行